

はるす

発行日 1999年6月10日 第3号
発行 札幌歯科医師会立口腔医療センター
〒064-0807 札幌市中央区南7条西10丁目
TEL (011)511-7774 FAX (011)511-1530
<http://www2.tky.3web.ne.jp/~sasshi>
E-mail sasshi@tky2.3web.ne.jp
発行人 小林重行 発行責任者 鶴岡一彦

>>>市民公開講座開催!!<<<

平成11年2月20日開催



口腔医療センターでは「なんらかのハンディキャップを持つ市民も地域社会の一員として、ひとしく生きることが保証されていなければならない。」という基本的考えのもとに歯科診療においても地域社会の中で患者自身の選択肢を広げていくことが必要であると考えております。今回は自閉症の患者についての基礎的知識や歯科治療を安全かつ円滑に進めるための臨床的知識について研鑽を図る目的で講演会を開催しました。

講師の清水康夫先生は横浜市総合リハビリテーションセンターの児童精神科で発達障害児の早期診断と早期療育に関する臨床と研究をなさっておられます。以下はその講演内容を要約したものです。

自閉症とは

自閉症に対する具体的なイメージは次のように言われています。物を尋ねても答えてくれない。視線が合いにくい。意味のないことを言ったりする。きまりきった物事に熱中して繰り返している。いつもと違ったことをするのを極端に嫌がる。何を考えているのか見当がつかない。いきなりパニックを起こす。自分自身を傷つけたりする。これらの事象より自閉症をめぐる数々の疑問が生じました。すなわち、どんな種類の病気か、他の障害と比べてどのくらいいるのか、原因は何か、治療は何か、ということです。

自閉症研究の歴史

初めて自閉的障害についてはっきりと認識し、報告を行ったのはアメリカのレオ・カナーです。彼は診療所に紹介されてきた11人の子供達（うち3人は精神科医の子供だったそうです。）に共通して異常な行動パターンがあることに気づき、それを早期乳幼児自閉症と名づけ「情緒的接触の自閉的障害」という論文(1943)で発表しました。カナーは一つの仮説を立てています。それは「彼らは人と情緒的に接触する能力（普通なら生物学的に備わっている）を欠いたままで生まれ、それが最も早い時期に発症した。」というものでした。その後1960年代までは当時の学問の潮流だった精神分析学の影響を大きく受け、自閉症は誤った育て方をした母親が原因という誤った認識が支配的となってしまいました。70年代になるとその後の研究により自閉症の子供の行動は、生まれつきあるいは幼少の早期からの発達面の障害に起因することがわかり、自閉症の原因は身体的なものであって親の育て方とは何ら関係ないことが明らかになりました。そして教育は子供の自立に役立つことが証明されるようになってきました。

自閉症の診断

自閉症障害の存在がより広く知られるようになったとはいえ、診断に関してはまだ難しい面があります。自閉症は脳波などの検査ではわからないので、その子の行動で診断するというのが90年代のコンセンサスになっています。「自閉症」では次の3つの能力が欠けているとされており、これを「欠陥の三つ組」といいます。すなわち、1. 感情的判断（共感、同情、尊敬、軽蔑など）を交えて人に接する能力<社会的相互交渉>の欠陥がある。2. 身振り、表情、視線、言語を情報交換に用いる能力<コミュニケーション>の欠陥がある。3. 人とやりとりしつつ、物（事）と人に注意を配分する能力<関心の寄せかたと実際の関わりかた>の欠陥がある。言い換えれば興味・活動が反復的、常同的なパターンとなって著しく限局しているということになります。実際には障害は多様な姿で現れ、一般知能の最重度障害から平均以上までのいかなる水準でも起こる可能性があり、他の発達障害を伴っている場合もあり、さらには加齢、環境、教育、個々のパーソナリティーによっても行動が変わり得るのでその診断はたいへん難しく、細心の注意と十分な時間を要することになります。

自閉症はどのくらいいるか？

横浜での小児自閉症に関する調査では1万人あたり16名、英国自閉症協会の調査では自閉症スペクトル（＝広汎性発達障害）は1万人あたり約90名という結果があります。定義が拡大したこともあります。発見技術が高まったこと、自閉症状に対する意識が以前より高まってきたことにより自閉症はもはや極めて稀とはいえなくなってきました。

自閉症に対する科学的考察

さまざまな能力を検査したところ、自閉症の子供の中には自閉症でない子供より優れた能力を持つものもあり、できることとできないことが混在していることがわかりました。

近年著しく発展してきた研究で他人の考えや感情を理解することが正常の子供ではどのように成長するかを研究するものを発達心理学といいます。人には思考や感情があるとの認識を「心の理論」といいます。平易な言葉に置き換ええますと「腹を探る」、「行間を読む」といったところですが、ウタ・フリスらは自閉症の子供たちの心の理論を研究し、この発達が顕著に障害されていることを発見しました。このことは自閉症における認知障害の謎を解くひとつの鍵である可能性を有するといわれています。

対症療法

自閉症の子供は時に多動、徘徊、攻撃、自傷、興奮、不安、恐怖、パニック、不眠などいろいろな精神症状を呈しますが、常にこれらすべてに対応すべきか検討する必要があります。これらが健康（生命）維持、家庭生活、学校での教育や仲間とのつき合い、施設あるいは病院での指導や治療など、いったい何にとって有害なのかを考えることが重要です。その重要度に応じてランクづけを行い、最も優先すべきことから必要に応じて対応すべきです。自閉症の薬物療法は次のような考えに基づいてなされるべきです。薬物療法はもっぱら対症療法であくまでも教育や療育の脇役と考える。

薬物療法以外の手段がないか再度検討する。処方目的を明確にし、期間を限定し、できるだけ少量で効果をねらう。薬物の種類としては対症療法のために精神安定剤（抗精神病薬、抗不安薬など）、催眠薬、また、てんかんの治療が必要な場合は抗てんかん薬を使用します。

自閉症の人の歯科治療

自閉症の子供（人）の歯科疾患は発見が遅れがちといわれています。その理由としては痛みに対する感覚が鈍い、痛みや不快を説明できない、慰めを求めてこない（甘える手段を知らない）などのことがあげられます。一般に歯科診療室では次のようなことがしばしば経験されます。

1. 診療室にさえ入ろうとしない。2. 治療が始まらないうちに、泣き叫んでパニックになったり、逆にどうにも動かなかったりする。3. じっと座ってはず、動いてばかりいる。4. 座っても、口を開こうとしない。5. 指示しても、従おうとしない。6. なだめようとしても、反応がない。

そのような行動をとる理由としては次のようなことが考えられます。

1. 治療に伴うであろう痛みや不快感に対する恐怖。2. 前に治療したときに味わった怖さやショックが、また繰り返されるかもしれないという心配。3. これからいったい何が起るのかという不安。4. 歯科医がとる態度に対する誤解。5. 治療が健康維持に役立つものとの認識の欠如。

自閉症の人の歯科治療をスムーズに進めるための工夫としては次のようなことがあります。

1. ことばは、短い文か単語で。（長いと理解しにくいので不安が増大する。）2. ひとつの意味を表現するなら、同じことばや同じ言い回しを。3. 興奮やパニックが起こっても、冷静さを保つ。4. 診療室や待合室には、親しみのあるものを備えておく（または、持ってきて置いておく）。また時には、個々に応じて特別な工夫が必要になることもあります。

たとえば、治療が終わるまで我慢して待ってもらう方法として、視覚的情報で「構造化」をはかる方法があります。例をあげると“写真カード”で手順を示したり、“砂時計”や“クッキング・タイマー”で時間を示すことでこれから何が起るかはっきりさせ安心させる工夫です。



『自閉症についての講演に思ったこと』

松本 啓くんのお母さん 松本 槇子さん

横浜から専門の先生が見えて講演を下される、しかもこのような催しは口腔医療センターとして初めてのことで、初回から参加して勉強できることをうれしく思いながら期待に満ち々々で臨みました。養護学校に通う自閉傾向と知的障害の4年生の啓（息子の名前）も預かり手が無く、やむを得ず一緒に参加。1年生から口腔医療センターにお世話になり、「かなり慣れてきているはず」の私の読みは外れ、初めての場所である会場に入ると、間もなく表情が変わり落ち着かなくなりました。啓が放課後を過ごしている学童保育の指導員も参加してくれていたため、講演の内容は後で教えてもらう事にして、受付のロビーでソファに座って待機。そこには治療や健診の度に顔を合わせ声を掛けてくれるスタッフの方々がいらしたので啓も安心できたようです。事前に子供の保育の有無を問い合わせた時に、初めての試みで保育の体制をとるゆとりが無かった、と聞いていたので私の方も割合簡単に諦めがつかしました。しかし、この後のスタッフの方々の心遣いが嬉しかったのです。ロビーにモニターテレビを運び一番見やすい席を譲ってくれたり、退屈になってきた啓と別室で遊んでくれたり、でき得限りのことを誠意をもってしていただき、本当に感謝しています。次回からは、保育体制ができると親の参加もしやすくなるので是非検討し実現していただきたいです。

さて肝心の清水先生のお話ですが「自閉症とは」という点で興味深く、「なるほど」とか「そうだったのか・・・」ともやもやしていた目の前の霧が晴れるような思いもあり、やはり来て良かったと思いました。が、研究的な内容に多くの時間が費やされ、現実に子供にどう対処すれば良いのか、どう向き合えばどの様になるのかなど私が最も聞きたい知りたいこと、またこの場にいる志ある歯科医や医療機関の方々、大勢の学生にも知ってもらいたい部分が時間切れで未消化の状態が終わってしまったようで大変残念に思いました。また何気ない一言だったと思いたいのですが、「精神科医でも幸い家の子は自閉症ではなかった」という、普通の人なら聞き流して記憶にも残っていないような言葉が心に刺さり、それは今でも刺さったままです。研究者や専門家にも色々な方がおられると思います。もっと色々な方々のお話を聞きたいのでどうぞまた良い企画をお願いしたいと思っています。しかし何といたっても、今回このような啓蒙的な講演の会を初めて開催して下さったことを通して、口腔医療センターの障害児者への取り組みの真剣さ・暖かさ・熱意やエネルギーを直接感じとれたことが私にとっての一番の収穫でした。この次の啓の定期検診も、何か柔らかい気持ちで迎えられそうです。ありがとうございました。

『講演を聞いて思ったこと』

高山 貴仁くんのお母さん 高山 寛子さん

口腔医療センターで、自閉症の講演会を行うことを聞き、正直言いまして驚きました。日頃から、同センターのスタッフのみなさまには、息子は歯の治療、私は心のケア（愚痴を聞いてくれる）など、大変お世話になっています。また、自閉症専門の先生の講演を聴講することも勧められて、同センターのスタッフのみなさまの熱心さとやさしさが伝わってきました。

清水先生のお話は、自閉症児をもつ親にとって知っている知識の再確認と、最新の情報の提供という面で重要な事をお話下さいました。また、自閉症と歯科治療の関係についても頷ける点が多く、親が「この子は、痛みに対する機能が働いていないのでは？」と思うくらい痛みが鈍く、それでいて治療となると全麻じゃないと無理というくらい大暴れをします。不安、恐怖、不快感などでパニック状態です。そんな息子も、治療回数が増えるうちに、全麻でなくても出来るようになり、最近では、「10?10?」と1~10まで数えると治療が終わると思い私に聞くのです。9と10の間を長くして少しでも治療時間を延ばす事をやってきましたが、時間や数字にこだわる息子には、清水先生のお知恵をお借りして、時計やクッキングタイマーが有効ではないかと思いました。また、自閉症児は視覚的に情報を得るので、写真カード、絵カードなどを利用することは、治療までの最短距離につながると思います。

今回、清水先生のお話の中では触れられていなかった、自閉症の治療や指導方法についても是非お聞きしたいのですが、次回お願いしてもよろしいでしょうか？とても大きなわがままですが、同センターのスタッフのみなさまに宜しくお願い致します。

『足 音』

村井 玲王くんのお母さん 村井 紀子さん 思いがけない怪我でベットの上の人となった。車椅子・松葉杖などの介護用品のお世話になっての生活を強いられているいろいろなことに気がつく。元気な時には考えられないような長い1日をやっとの思いで過ごして眠りにつく前のひととき。カーテン越しの廊下から聞こえてくるさまざまな足音がある。杖やら不自由な足を引きずっての足音を聞けば頑張っているなど思い、足が自由にきく人の、持て余し気味にペッタラペッタラとスリッパの大きな音を聞くと不快感が湧く。足が不自由な私のひがみか……。ところが同じ大きな足音でも看護婦さんが忙しそうに歩く時のナースサンダル（白のバックバンドの）の音は心地よく力強く聞こえてくるから不思議だ。

我が子の障害と共に生きている私が、足にほんの少し怪我（障害）を負って体験したことは、これから先もずっと痛みを背負って生活していかなければならない人達のことを思えば少しくらいのことでイライラしていただれないと思ひ直し、ここ医療センターのスタッフの足音に励まされて今まで生活してこれたことに感謝・感謝。



口腔医療センター受付の 藤野恵美子（旧姓 森）さんがこの度結婚されて札幌を離れる為、7月30日をもって退職することになりました。

ごあいさつ

心労を抱えながらも、一生懸命に頑張っているお母さん方（ご家族）の姿、熱心に入園者に接する施設職員の方の様子、そして患者さん方のひたむきな心にふれる度に、私自身の心が救われ、癒されてきた17年間でした。

この感謝の気持ちは、とても筆舌には尽くせません。皆様との様々な思い出を振り返ると、何もかもが懐かしく胸が熱くなる思いです。

名残惜しい気持ちは尽きませんが、皆様とのふれ合いの中でつちかかってきたものを大切に、これからの人生を歩んでまいりたいと思います。

長い間本当にありがとうございました。どうか皆様くれぐれもお体を大切になさって下さい。そして、皆様の毎日に一つでも多くの“喜び”や“幸せ”が訪れますようにと心からお祈りしています。

藤野 恵美子

施設職員対象講習会報告

施設職員の方々を対象とした口腔衛生講習会を去る平成10年11月13日（金）に実施致しました。実習を含んだ講習会を企画しましたところ、17施設より36人の参加を頂きました。

近頃 以前に比べ、施設に入所している患者さんのお口の中が大変きれいになってきています。熱心に講義に耳を傾け、相互実習に取り組んで頂いた結果をスタッフ一同嬉しく思っています。

平成11年度も講習会を実施する予定ですので多くの方々のご参加をお願い致します。

歯科衛生士 藤原 咲子 記

救急診療部からのお知らせ

夜間の歯の痛みなどに対する救急処置を目的としています。継続的な治療は受けられません。ご注意ください。

診療のご案内

診療時間 午後7時～午後11時（年中無休）

所在地 札幌市中央区南7条西10丁目

札幌歯科医師会館内

電話番号 (011) 511-7774

※必ず保険証を持参して下さい。

編集後記

6月4日 何の日だっけ？ そう 虫歯の日 正解!! 虫歯になったら、痛いもんね。じゃ～この言葉は？ 8020運動 えっ 80歳で20本以上の歯を残そう。よく知ってるね。でもね、現在の80歳国民平均では、達成できていないんだ。国民平均年齢だと、あと40年近くはかかるけど、この目標に向かって、今の私・貴方の歯を大切に、一人一人が努力すればいいんだよ。無理することなく、背伸びせずマイペースでね。

編集委員長 富田 達洋